

とりという状態であった。

あとがき

十方檀越という仏教語がある。今清和園縁起を書き終えて、この言葉をしみじみと噛みしめている。むしろ言うならば、十方檀越の意味合いが、縁起を書いているうちだん／＼と解ってきたような気がする。清和園をとりまく十重廿重の、山河大地、森羅万象をふくめた人間界の因縁が純熟し

て、清和園を生み育てた。——そういう実感である。意あつて筆いたらず、本稿ではそのことを語らず、大方を私の苦辛談に費してしまつたのは、かえす／＼も残念である。年若いものが、過去を顧みていうほど愉快はないと聞く、私も老化現象を起したと御宥恕を賜りたい。伏して拝みたいような、羅網のきらめきにも似た清和園十方檀越のみな様方の善意については、又改めて記する時もあるう。

作礼而去。

あるキリスト者の福祉の實踐

藤 山 照 英

(仏教大学助教授)

一、教育をめぐる一騒動

滋賀県能登川町佐野、猪子山^{イノコヤマ}の山麓に、重度障害児（重い知恵おくれの子供）のための施設「止揚学園」がある。国鉄能登川駅から、徒歩で二十分、タクシーなら五分ば

かりのところで、近くには古い禅寺善勝寺があり、緑の木立と小川に囲まれた大変美しい地帯である。園長の福井達雨氏は、キリスト教をバックボーンに、きわめてユニークな福祉活動をされている。知恵おくれの子供たちの声なき声を文筆にたくされ

て、すでに十数冊の著書もあり、国内はもとより海外まで年間三百数十回も講演をされるという活動家でもあるので、児童福祉関係の人たちにはかなり有名な人であろうと思う。滋賀県は、他県に比べて、比較的、児童福祉施設の多い県であるが、それぞれ障害の程度などによって制限があつて、「止揚学園」は、他の施設では引き受けないような重度の障害児をあづかっているそうである。

ところで、同じ能登川町に住みながら、筆者は「止揚学園」という名前を聞いていても、町内の野道などで、一群の変つた子供たちの遠足の行列にすれ違つたりしていても、とんと、学園の活動や町内にどのような波紋を投げかけているかについては最近まで知らなかった。実は、「止揚学園」は、昭和四十一年、近江八幡市から能登川町佐野に移転されてから、人口二万たらずの湖東の田舎町の行政や教育や地域住民の教育観などに、大きな影響を与え続けており、現在までも尾を引いているのである。それは、一口にいえば、重い知恵おくれの子供たちの教育権をめぐる問題である。

昭和四十五年、学園の「障害児と普通児との共学」という理念が実行に移され、こうした福祉と教育のタイ・アップは、日本では最初の試みであったといわれる。現在、「止揚学園」の園児三十九人（六才から二十八才）のうち、地域の南小学校に小学生として十名、能登川中学に中学生として九名が、学園と小中学校の先生の送り迎えて通学している。残る園児のうち十二名（小学生八名、中学生四名）については、学園の中で、小中学校の先生が出張して教育に当たっている。しかし、その場合も、運動会のような全校的な行事には、全員が参加することになっている。

ところで、障害児の施設と地域の学校が連けいして、現在のような普通児と一緒に教育するという態勢が発現するには、事がスムーズに運ばれたわけでは決していない。すでに過去のことだが、その決定までには、町教委、町議会、各学校、P・T・A役員会などでも、もめにもめ抜いたといわれる。実は、大変な騒動だったのである。当時の町の教育長A氏は、そのために命を絶めたと言う人もあり、町議B氏が当時、

「学園の連中はかなわん。ぐるりと取りまいて一つ一つメモを取りよる。」と言っていたのを聞いたことがある。「止揚学園」の側からすれば、新しい福祉理念に基づく実践であり、障害児に対する差別への挑戦でもあった。しかし、この「障害児と普通児との共学」、障害児の学習権の問題は、決して解決された問題ではなく、現在まで尾を引いているというのが実状である。

八月〇日、筆者の訪れたとき、「止揚学園」の職員の方が、来年度からは子供たちを八日市市の養護学校の方に移さねばならないかもしれないと言っていた。というのは、小学校P・T・Aの中に、共学に反対の人たちもいて、反対派の署名を集めて町議会に働きかけ、委員会がそれを受理するという事態が生じているのである。新聞に載った記事を引用する。

「滋賀県神崎郡能登川町でいま、障害児教育をめぐる熱い対立が続いている。対立の中心をつきつめれば、「すべての子供にレッテルをはらず、地域の学校であたりまえの教育を保障する」という立場に立つ

か、あるいは、これまでのように「障害児（者）」を地域や普通学校から排除し、施設や養護学校、特殊学級に隔離収容する」立場に立つか、という普遍的な問題に帰着する。——中略——ところで、いま問題が起きているのは能登川南小学校。南小には「仲良し学級」と呼ぶ養護学級が三クラスあるが、止揚学園の子は、この養護学級で授業を受ける者、一部普通学級で授業を受ける者、全時間普通学級で授業を受ける者の三通りに分かれている。つまり、不十分ながらも、南小では、「障害児も普通児も共に学ぶ」という方向が模索されてきたということができる。

だが、こうした障害児教育に反対する一部の父母がいることも事実で、南小P・T・Aはこの対立を解消することができず昨年から崩壊したまま。その後も事態は好転するどころか、ますます悪化の一路をたどり、一部父母は署名を集め、「普通児と障害児の共学に反対する」との請願書を町議会に提出、同議会厚生文教委員会はこの六月議会で採択した。

問題はその請願の内容である。普通児と

障害児との共学は、①教職員の意欲を低下させる。②児童の学力や体力の低下を招く。③障害児のために普通児の情緒教育面に問題が生じている。——というのがその骨子であるが、教育の現場である南小の教師たちは一部父母の主張に同調していない。私は南小のI校長に確認したが、同校長は「(父母の主張は)現実を見て言っているものとは思われない。過去を積み上げて想像で言っているのではないか」との言い方で、一部父母の主張を否定していた。さらに一部父母は「キャンプ行事で低学年が休校になったのは止揚学園の子のせいだ。止揚学園の職員は大声で学校と交渉するので授業妨害となり、また学園との交渉が多くて自習時間がふえている」とも主張しているが、これらの点についても同校長は「そのような事実はない」と否定した。教育の現場が否定するところを根拠にして障害児の「排除」を町議会に訴える一部父母の態度、また、止揚学園などの当事者の意見を聞くことなく請願を採択した厚生文教委の態度にはどうしても納得できないものがある。町

教委が動かないため業を煮やした一部父母が今月一日、町役場におしかけるという一幕もあり、もって行き場のない不満にいらだつ父母もいる。

私はこれら一部父母の中心的存在と思われる数人にも会って話を聞いたが、その意見はいずれも感情的で論理的なものではなかった。たとえば匿名を条件に口を開いたAさんは、「福井先生は少数者の意見も尊重せないかんと言わはる。民主主義を無視してむちゃくちゃ」と、形式的民主主義が少数者差別を招きがちなことを考えようともしなかった。

では子供たちはどうか。私は運動会にむけてのマスゲームの練習をみたが、障害児と普通児の関係はいともなごやかであった。南小の普通児が書いた作文を読んでも、障害児も普通児もその日常的接触を通じて明るく伸びている現実が手にとるように分かる。そこに親がわけ入ることが許されるのかどうか。子供集団というものはさまざまタイプの子供がぶつかり合いながら共に育ってゆく創造的な集団である。邪魔者として差別され、のけ者にされてきた障害

児(者)の歴史をふり返るとき、なお一層、私は教育は共育であるとの思いを強くするのである。」(一九七七・九・二十三毎日新聞)

こうした一部父兄の運動によって町教委が動くことになれば(それは、今のところ未決定である)、「止揚学園」の子供たちは、能登川町より十キロも奥にある八日市市の県養護学校に送られることになるのである。筆者が関心をもったのは、「止揚学園」という一施設が投じた一石によって、能登川町の各層の人たちが、どのようにこの問題について考えているかということであったが、実は、この問題は現在の教育観・社会福祉観にかかわる大問題であって、だれも明確な意見を述べる者はなかった。

学園の職員の方は、「障害児が差別されるのは障害のためではなく、差別の原因は社会にある。」と言われていた。話によれば、現在でも、障害児をもつ父母は世間体を考えてわが子を座敷牢に入れたり、生活苦からわが子を殺してしまったり、また、多くの障害児が福祉施設ではなくて精神病院の方に入っているそうである。今なお、

そうした子をもつ親たちは、日本社会特有の偏見、たとえば因果応報とか先祖のたりといったいわれのない偏見に押されて、わが子を社会の眼から隠そうとするのである。障害をもつ子供たちは、それで一層、社会の中で生きるという「帰属」の場を失っているのが現実である。統計によれば、障害児の中でも、知能障害の場合が、視聴覚障害児・肢体不自由児よりもはるかに多いそうである。そして、世間の偏見も、これら知恵おくれの子供たちに一層集中するのである。

これらの障害児は、従来、社会の中に放り出され、さしたる保護も与えられず、すべてが親の責任において処理されてきた場合が多い。それが、日本の福祉のおくれと言われていることである。しかし、児童福祉法などの法律が制定され、公費によって各種の施設が多く作られるようになってきたが、彼らを一般の社会から「隔離」という原則には変りないのである。障害児の保護や教育は、普通児の教育とは区別して、県や国が面倒を見るべきであるというのが一般の考えようである。「止揚学

園」の福祉理念は、まさに、そうした日本社会の福祉通念に対する抵抗であり告発であるように思われる。

「お前たちは、僕たちの仲間ではない。だから遊んでやらない。」(福井達雨著「生命をかつぐって重いなあ」)

「保育園・幼稚園・小学校・中学校に來てもらつては邪魔になる。世話がかかるから困る。君たちは施設や養護学校に行くべきだ」(同)と世間の人たちは考える。しかし、

「人間は、人間の仲間があつて初めて発達する。誰も相手にせず、友達もいない。一人ぼっちでは人間は生きられない。私たちは人間仲間の中で、人間として認められ、所属を与えられて生活している。重い知恵おくれの子供たちは、人間として生まれ存在しているにもかかわらず、人間としての仲間からの所属が奪われている。」(同)

「今、施設というのはこんな考えをもっている。それは、分離と統合という考えである。すなわち統合して施設を大きくして、そして社会から隔離して子供たちを保

護してしまふ。こういう考え方は間違ひである。……施設を統合して大きくして、そして私たちの社会から隔離保護してしまおう、養護学校をつくり、あるいは重症身心障害児の施設をつくり、コロニーをつくって、そして大きなものをつくって、私たちのこの社会から子供たちを外に追い出してしまおうと考えている。こんな大きな間違ひはない。」(同)と「止揚学園」の職員たちは主張するのである。

さて、わが家にも、能登川中学に通う中学生の息子がいるので、「止揚学園」の生徒たちの声を聞いてみた。能登川中学では、学園から九名の児童をあづかつていて、「K学級」(Kは担任の先生の名前)という養護学級がつくられ、そこで掃除作業、学級活動、給食などが行なわれ、授業は全教科にわたって普通中学生と同じように受けている。ほかに「T学級」というのがあつて、これは授業についてゆけない生徒のための促進学級である。さて、わが家の長男も、なかなかの差別マンである。そして、一般生徒の考えを代表しているようでもある。「学園の子は汚い。『嗜みつくから困る。』

「授業に出ていても何も分らないし、みんなの勉強の邪魔になる。」「送り迎えする先生が忙しそうでかわいそうだ。」「みんなからかわれなくても喜んでいい。」「かまってもらえれば嬉しがつている。」「掃除は上手にやりよる。わしらよりうまい。」というようなことを言っている。中学ともなると、先の小学校の場合とは違った面が出てくるようである。

能登川中学へ行つて、K先生の話を聞いてみた。この方は、南小学校で障害児をあづかった経験を買われて、中学に移られた先生である。御主人も福祉の方の仕事をしていて、社会科の先生であるが、障害児と普通児との共学は模索の段階であつて、その教育効果については自分でもよく分らないということだった。先生間で議論が戦わされ、いわば一つの実験のように進められているのである。学校というものが、生徒に対して知識を与え体力を向上させるなどの教育の場だとすると、重度の障害児は、そうした面では、ほとんど絶望的なのである。ただ、共学によって生徒に対してモラル面でのプラスはある。障害児に対して、

思いやりの心を養つたり、社会や人間間のいろいろな差別に気付けるといった教育効果はみられるということだった。

しかし、こうした共学が、本当のところ障害児のためになるのかどうかということになると、自分にもよく分らないと言われていた。現在の学校教育が、その子供たちの潜在的能力を開発するのに役立つのか、知力・体力面で普通児との差が大きすぎれば、かえつて障害児のためにマイナスになるのではないか。普通児と障害児との共学は、今のところ、一つの実験なのであつて、教育の立場と福祉の立場とは、実際に個々の場面において、噛み合わない面も出てくるようであつた。教育の場では一律性が支配するが、福祉の立場では教育といつても、きわめて個別的な配慮が必要とされるのであり、学校において果してそれだけの配慮ができるのかどうかという問題もある。

学校の立場と「学園」の立場との違いによる衝突も今まで多く見られたが、最近では学園側も、障害児自身の過失ということも認めるようになってきたということだった。

た。たとえば、障害児が階段で転んだりした場合、それは、学校や先生の配慮の無さという責任だけでもないということを学園側も考えるようになってきているということだった。つまり、学校ではそこまで面倒が見られないのであり、福祉の立場では、もっときめ細かい配慮が必要とされるのである。また、次のようなことが生じる。学校でクラス対抗のソフト・ボール大会があつた。学校の先生の方では、学園の子はともソフト・ボールは無理だろうということでも選手から外した。しかし学園側の抗議により学園の子も参加することになった。そうするとどういうことになるか。競技は勝負を争うよりも、参加することに意義があるゲームとなるのである。体操のD先生の反省会での発言。「今度のソフト・ボール大会は素晴しかった。いつもの大会では勝つか負けるかということが主体となつていて、そうすると下手な子は小さくなって、上手な子はいばつていて。それが今度は止揚学園の子供が入つたために、子供たちなりにあの子供たちを助けてどうして勝とうかと一生けん命に考えた。そのうちに人の

助け合うことのすばらしさを子供たちは知った。」(南小での話) これは、普通児と障害児との共学によるプラス面の一コマであらう。

さて、「止揚学園」の職員の方に、理念はともかく具体的な教育効果についてたづねてみると、「国語や数学を一緒にやることは不可能に近いけれども、情緒面での教育・音楽・図工・体操・掃除などの作業・運動会・旅行への参加などは可能である。」ということだった。学園の応接間には、園児の一人が製作した「エビガニ」と題するハリ絵が飾られているが、素人眼にも色彩・造型感覚ともに素晴らしいものであった。

しかし、普通児と障害児との共学を押し進めた止揚学園の側では、さらに大きく、もっと高い教育効果をねらっていたと思われる。それは、障害児との共学は、逆に、障害をもたない生徒たちに、モラルや人間的情緒の面で無形のプラスを与えろという確信であった。「生かされたのは障害を持たない子供たちだ」という、日本の現在の教育に対する反省と新しい教育の実験の場を提供することにあつたのである。

ともかく、一福祉施設の起こした障害児の教育権を求める運動は、ただ今、地域の教育界、行政面、広くは地域住民の教育観や福祉観に大きな問題を投げかけているのである。とくに、現在の公立中学では、高校受験を目指すため選別的な教育態勢がとられているが、皮肉にも、学園の障害児たちの存在そのものが、そうした教育の在りかたへの痛烈な批判ともなっているのである。

二、ある福祉の思想

福祉事業それ自体は、歴史とともに古くであらう。森永松信氏によれば、社会福祉は「宗教」と「人間科学」という二つの重要な源泉から発達してきて現代に至っていると言われている。(「社会福祉と仏教」誠信書房) わが国においても、最近になって社会福祉ということが盛んに叫ばれ、県や町や職場などから福祉に関する文書などが配られるようになった。日本は福祉国家を目指しているとも言われ、各種の社会保障も以前と比べると、数段整えられてきたように思われる。社会保障と社会福祉とは、車

の両輪のようなものであつて、社会保障は行政的制度的に整備されて行き、人々もそのように理解しているが、社会福祉というと、人間それぞれの価値観にも関わる根の深い問題である。森永氏によれば、「福祉」Welfare とは、「無事に行く」「よい旅行」を意味し、「一人ひとりの人間」が、安らかに無事におくる人生行路に関する事がらであるとされる。(同書) そうであれば、社会福祉についての思想や実践は歴史と共に古くであらう。しかし、社会福祉の前身者として、古代から近世にかけては、「慈善事業」が行なわれてきた。慈善事業を担つて来たのは、主として宗教家・宗教団体であつたらう。ところが、それらの活動は、宗教的信念による善意に満ちたものであつても、主観的で計画性や合理性に欠ける面があり、近代に至つて、社会全体のために合理的、さらに民主的科学的に処理することを目的とするようになった。すなわち、近代社会の経済体制による基本的矛盾に起因して重大な社会問題や社会福祉の問題が発生するにつれ、従来実施されたこの種の事業の観念が、慈善的性格から

社会自体の責任の性格に移行せしめるとともに、社会福祉の対象が単なる「個人」より、「社会成員としての個人」へとその内容を移している、森永氏は書いておられる。(同書)

宗教は、民衆に対して「救済」の教えを説くものである。仏教やキリスト教に属する宗教家が、崇高な民衆愛に基づき、また自己の信仰の社会的実践として社会福祉の事業に従事してきたであらうし、その「救済」が観念的・思想的な領域から具体的生活的領域に及んで行ったとしても不思議ではない。「宗教」と「社会福祉」との、こうした密接な関係は現代においてさえ指摘できるところである。事実、民間の社会福祉施設のうち、宗教関係者によって運営されている場合が圧倒的に多いであらう。また、社会福祉のような縁の下の力もちは、現代においても、宗教的な強い奉仕の精神がなければ継続することができないであらう。

さて、問題は、従来の社会福祉事業のもつ前近代的な慈恵の恩恵的な性格が、現在問われているところにある。最近、社会福

祉について各方面からその再認識が叫ばれるのも、従来の日本人一般の社会福祉観が、やはり慈恵の恩恵的なものであったことに對する反省からであらう。

社会福祉とは一体どういうことか、森永氏によると、「社会福祉とは、社会生活上の困難を解決するために、社会関係の主体的側面(個別的原理)に立って、社会制度と関連づけながら適切な援助の措置をすすめる活動である」。(同書一八五ページ)と定義されている。社会関係の主体的側面、個別的原理とは、人間と人間の人格の関係の意味である。そこに、社会福祉の問題が、単に行政的政策的に解決されるだけでは不十分であり、また、それでは方向違いであり、人間のモラルや宗教といった根本的な問題にかかわって来るのである。「止揚学園」の福井氏は、日本人の福祉観は「同情的福祉観」であるとして、「日本人というのは、愛というものの本質が非常に少なく、同情という領域が非常に強い。」

「生命をかつぐって重いなあ」と語っている。われわれが、不幸な人間や子供に對するとき、同情や憐れみの心は持つても、

愛の立場で連帯の心で接する人は少ない。同情とか憐れみの念は、富める者・力ある者が、貧しい者・力無き者にかける思いである。それは、上位の者が下位の者にかける思いである。このような日本人の福祉観は、従来の社会福祉事業にたずさわる人々の考えでもあった。明治以降の近代日本において、社会事業の先べんをつけたのはキリスト教関係者であったが、そうした先覚者たちのあやまりについて、福井氏は次のように語っている。

「私たちキリスト者の先輩は大きな間違を犯した。それはどういう間違であったかという、その時分、施設の先覚者たちは個人から募金を集めて運営して行かねばならなかった。国はほとんど助けてくれなかった。その募金をうるために、この人たちは演説や講演やいろんな事を訴えて同情を求めたのである。この子供たちは役に立たない子である。生きていてもしょうがない。しかし、その役に立たない子の楽園をつくって過させてやろうと思う。どうか皆さん、われわれを助けて下さい、と訴えざるを得なかった。」(同書)

人々の同情心に訴えて募金をしたことが、かえって誤った福祉観をうえつけることになったのだと語っている。さらに、福井氏の指摘する今一つの間違いは、社会事業や福祉事業をするためには、「特別な召命感や強い信仰や決断」が必要であることを強調しすぎた点である。事実、当時の日本社会にあつて、これらの先覚者たちは、強い信仰をもった「立派な人」たちであつたのである。けれども、こうした教会関係者の言動が、非常に間違つた施設観・障害児観を日本の社会の中に植えつけてしまつたと述べておられる。施設というと、何か特別などころ、隠惨な隔離された世界を連想させるような結果が生じたのである。こうした現実について、福井氏は次のように述べている。

「止揚学園では困っている現実がある。施設というところはお客さんがふえればふえるだけ募金がふえるのだが、この学園ではお客さんがふえればふえるほど募金が減つて行く。なぜかという、止揚学園に見学に来た人はここにかわいそうなのは何もないと言う。……涙を流してハンカチを

ぬぐわないと日本では募金が集まらないのに、この学園には涙を流す種がないからである。」これは、事実というよりも、福井氏の日本人の福祉施設についての通念に対する痛烈な皮肉なのである。宗教的信仰についても、

「私たちの仕事は強い信仰や召命感が必要な仕事ではない。そんなものをもつて飛び込んで来るような仕事ではない。この私たちの差別の問題を非常に強く感じて仕事をして行く中で、心が燃焼されて行く仕事である。はじめから燃焼してとび込んで来る仕事ではなくて、仕事をしている中から心が燃焼し、そして信仰決断が生まれてくる仕事である。」と言っている。

「止揚学園」の福祉活動は、世間一般の同情的福祉観を拒否し、それをのり越えるような形で進められているのである。それは、福井氏が、障害児の問題の中心を、社会問題として、すなわち「差別の問題」として認識していることに由っている。「この子供たちの問題というのは、かわいそうな子供の問題なのではなくて、実は差別の問題である。」と言う。障害児と障害児観

の歴史を述べて、「この子供たちへの差別はどうして生じてきたかは、国家または家族制度が確立してきた時期と軌を一にしている。その時期にはじめて子供たちへの差別が生まれてきた。」

「国家形成に役立たないものはほかにしてしまえ、家族制度に役立たないものは捨ててしまえ、国家や家族制度というものが確立しないときには、この子供たちには差別は全然なかった。」（生命をかつぐつて重いなあ）「紀元前から古代、役に立たないものはどんどん殺された。（絶滅期）それが中世になると、王侯貴族の玩具として、いろんな人間から笑ひ者として生きてゆかざるを得なかった。（嘲笑期）。十九世紀に入つて初めて医療的に子供達を直してみたいという試みがなされてきた。（身体保護期）そして、二十世紀の今は、この子供たちにとつて教育の世紀だといわれている。すなわち教育の世界の中で、この子供たちをみる時期にかわつた。」（同書）そして、現在の日本人がもつ障害児観は、今なお、嘲笑の対象とするなど中世以前の

障害児の問題を考える場合の誤りは、それを「社会問題」として捉えないで、個人的な理由、先天的な原因に求める傾向が強かった。はなはだしくは、血統とか先祖のたたりといった非合理的なものから、I・Qとか遺伝といった先天的なものに「差別」の理由が求められていたのである。そのように「差別」の理由を個人的なものに求めることも、従来の障害児観の大きなあやまりであつたと言うのである。

「差別」は、まさに、歴史的・社会的なものに起因すると福井氏は考えるわけである。「底辺」というものは、はじめからあるものではない。その時代によってつくり出されて行くものだと思う。ところが、資本主義の社会では、お金のないもの、力のないもの、役に立たないものは、全部は、かされて行く。ほかされるものは底辺におとされる。底辺におとされた人は、必然的にその時代に対して不満をもっている。」(同書)と福井氏は書いているが、智恵おくれの子供たちへの「差別」は、その子供たちには原因があるのではなくて、障害をもたない人々によって作り出されてゆくという指摘

である。そこで、社会福祉の活動は、金のある者、力のある者、「その時代に生きてゆける者」に対して、告発し反省を求める運動をとらざるを得ないのである。社会福祉が原理的に個の生命を尊重し、人格的な関係に立つとすれば、社会福祉の活動そのものが、現代の競争的社会においては、時代に対する批判者の立場に立たざるを得ないのである。

福井氏の著書(論文ではないが)を読んで気付くことは、「目に見えるもの」・「目に見えないもの」という言い方や、「現象面」と「本質」といった表現が度々使われている。現代社会は物質文明の華美な生活環境や数量的処理を目指す「目に見えるもの」を追い求めているのに対して、「目に見えないもの」・「本質」人間の生命価値、に立脚するのが福祉の立場であると考えられている。それは、現代社会において価値あるものの反極の立場に立つことを意味する。たとえば、一般に多くの障害児施設では、子供たちが怪我をしないためにヘルメットを使用するが、「止揚学園」ではヘルメットを使用する代りに、多くの職員的眼

があると職員の一人は書いている。(「止揚」No.14) こうした点に、この施設のきわめてユニークな方針があるのである。

福井氏は、日本の施設の保母が短期間でやめて行く原因を論じて、「多くの人は行政とか、日本の国の社会福祉の貧困からその問題を考えているが、私は人間の本質から考えてみたかった。」と述べている。また、「多くの人は国が悪いんだという考え方位しかもっていない。私はそういうとき、国が悪いんだという発言をされると、なんともいえない、冷えびえとしたその人の心を感じる。」とも書いている。こうした発言からも、底辺の問題や社会福祉の問題は、資本主義社会の政策上の問題として受けとめながらも、さらに、そうした問題に対して人間としていかに克服するかというきわめて実践的な立場に立っていることがうかがわれよう。

「ある人は施設に入った子供たちはかわいそうだと言って下さる。それを本質的に言って下さったらいいのだが、現象面的に言って下さる。確かに本質的にいうと、施設に子供が入ることは不幸なことである。」

本当に大切なことは、施設なんかなくなつてしまつて、私たちが歩いてゐるこの社会の中に、子供たちが胸をはつて歩けるような社会ができることが、本当に子供たちの幸福につながつてゆく。」

こうした言葉のうちに、学園の福祉活動が日本の社会的現実に対抗せねばならぬ方向と、その活動自体が高いモラルに基づくものであることが言われているのである。

福井氏は、施設の実態について、「私たちは、国からお金をもらわなかつたら施設ができない。社会福祉は進まない。一方、国からお金をもらえばもうほど、国の行政や法律の枠がその施設をとり囲んでがんじがらめになつてしまふ、という悪循環の中にいる。」と述べている。福祉や教育の場には個人的活動の場がどうしても必要なのに、信仰や理想、情熱や良心が生きなければいけないのに、「行政の場がとても強く」「個の場はこんなに小さい。」（現在、止揚学園は社会福祉法人となつており、その運営費の五〇パーセントを国・県より措置費として受け、あとの五〇パーセントは自力で負担している。）現代のような競争

社会にあつて、社会福祉の活動は、「企業の形態をとらざるを得ないが、」その本来の原点に帰れば帰るほど、社会政策的な面との矛盾が激しくなるといふ。

「この子供らを不幸にしたのは、実は私たちではなかつたか。このことを強く感じるようになった。国がこの子供たちを不幸にしたのではなく、親が不幸にしたのでもなく、私たち（日本の社会的現実）が子供らを不幸にしたのではなかつたか。そのことをこの二十年間、重い知恵おくれの子と一緒に生活しながらしみじみと感じてきた。」と福井氏は書いてゐる。そして福祉の実践を生み出す原動力を、「怒りと激しい恥しさと、そして子供たちへの謝罪——という三つの原点」に置くと言う。その「恥しさ」とは、そのような子らの不幸を見過してきたことへの「恥しさ」であり、今もつてそうした不幸に対して無関心であり続けることに對する「恥しさ」である。この「三つの原点」から引き出される福祉活動の目標を、福井氏は、（一）教育。不幸な子らとその親たちと差別する人たちの教育。（二）抵抗という使命。不幸な子らた

めてでなく、不幸な子らと共に歩むという点に求めるのである。

また、福井氏は、「個人倫理」と「個の倫理」をきびしく使いわけて論じてゐる。それは、日本人の福祉観が同情的であつて愛の立場による場合が少ないという先の指摘とも関連するが、「個人倫理」は、彼によれば、ためにする社会福祉である。たとえば、宗教関係者の福祉事業に「特別な召命感や信仰や決断」が必要と強調されたり、そうした宗教的精神の高さが賞讃される傾向があるが、そうした「立派な人」は社会的弱者に対して立派なのであつて、どうしても「個人倫理」的傾向を帯びやすい。それに対して、「個の倫理」とは、共にする社会福祉の意味である。「時にはエゴイズムという自分のみの場で働く個人の倫理で歩む私たちは、個人が外に働きかけ、他者と連帯をもつて歩む個の倫理が欠けている。個が連帯し個人の内側から外への方向が生まれないかぎり、その行動は自分のみ生かし他者を殺すものとなる。」と述べてゐる。